第1章 昔の厚別

厚別の大地

厚別の大地（大きく分けると）
- 北：平野部～ほぼ泥炭地
- 南：丘陵部
  - 野幌丘陵～主として泥岩や砂
  - 厚別台地～軽石流

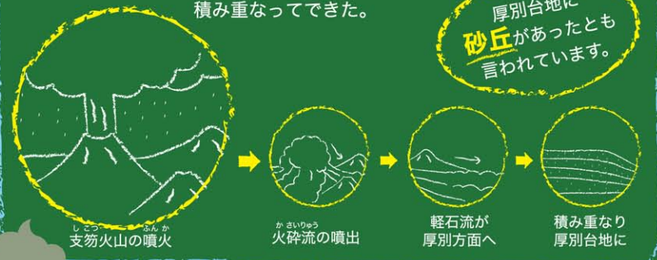
大地ができるまで

1.平野部
平野部の**泥炭層**は、約3,800年前にその形成が始まった。

2.野幌丘陵
約200万年前から80万年前くらいの間に、**海底にたまった泥や砂**などが積み重なり、その後の地殻変動で盛り上がって、土台を形成した。

3.厚別台地
約36,000年前から30,000年前くらいの間に起こった、支笏火山の噴火により**軽石流**が積み重なってできた。

厚別台地に**砂丘**があったとも言われています。



厚別区周辺の地形図

資料提供：札幌市埋蔵文化財センター

アリス号で昔の厚別へタイムスリップしている間、厚別の大地の歴史について勉強しよう！

大昔の厚別は動物たちの王国

DATA NO.1 シガゾウ

イラスト：北海道開拓記念館

▲シガゾウ臼歯化石

マンモスゾウの遠い祖先にあたる象で、北海道から九州までひろく化石（歯）が見つかっています。背の高さは2.5〜3mで、やや曲がった牙をもっていたと考えられています。

DATA NO.2 ステラー海牛

イラスト：北海道開拓記念館

▲ステラー海牛下顎化石

▲ステラー海牛肋骨化石

体長は最大で8mにもなる海牛（ジュゴンやマナティーの仲間）です。象に近い動物で、海藻を食べて生活していました。野幌丘陵の地層からは、化石も発見されています。

DATA NO.3 約80万年前の海岸線

GO オオムカシ FOR アツベツ

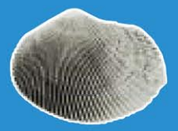
HISTORY

約100万年前は、シガゾウなど大型の動物たちが自由に往来する動物たちの王国でした。海もあり、セイウチが日光浴し、ステラー海牛たちがのんびりと海藻を食べていたかもしれません。

厚別区は昔、海だった!

野幌丘陵の地層に残された貝の化石から数回、厚別が海に沈んでいたことがわかっています。

▲ダイシャカニシキガイ



▲ムカシオナガトリガイ

縄文時代の人たち

厚別区で見つかった土器

土器を使って、動物の肉や魚などを調理していました。

厚別区で見つかった石器

石器を使った斧や、弓矢、やりを作り狩りをしていました。

DATA 厚別区の遺跡分布図（縄文時代〜擦文時代）

GO ジョウモンジダイ FOR アツベツ

HISTORY

約8000年前、札幌は縄文時代でした。縄文時代の人たちが暮らしていた確かな証拠として、厚別区内でもこの時代の住居跡や狩りのための落とし穴、土器や石器などが見つかっています。

アイヌ文化 先住民族 アイヌ民族

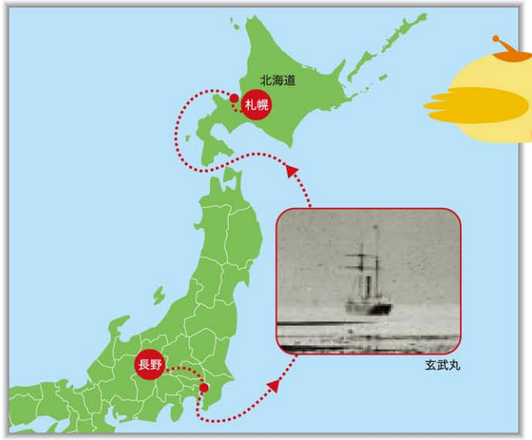
縄文時代の人たちの子孫として古くから北海道で暮らしているアイヌ民族は、独自の言語であるアイヌ語をもち、ユカㇻをはじめとする口承文芸やイオマンテなどの伝統儀礼、あるいは特有のアイヌ文様などに代表される豊かな文化を発展させてきました。アイヌの人たちが育んできたこのような文化は、現在も大切に受け継がれています。厚別区内にも野津幌などアイヌ語がもとになった地名があります。

※アイヌ語カナ部分については、既存フォントで代用しています。

サッポロピリカコタンノミ（家と村の無事を祈る儀式）

時は流れ、明治時代

厚別は、1883年（明治16年）に河西由造たちが、現在のJR厚別駅の周辺を開拓したのが始まりです。
当時は小高い所が森林で、低い所は湿地だったと言われており、開拓にはたいへんな苦労があったようです。



1882年（明治15年）にふるさとの長野をあとにした河西由造たちは、横浜にむかい、船に乗って札幌へとたどり着きました。

札幌県に開拓の土地を申請し、許可を得て厚別の地に移住しました。

のべ100人もの人を雇い、木を切って小屋作りをして開墾を進めました。

苦労を重ねながら、田畑の開墾に成功し、厚別開拓の基盤ができたのです。

厚別開拓の先駆者 河西 由造

1845年（弘化2年）生まれ。長野県出身。大変な苦労をして開拓に成功し、後に水田約55ヘクタール、畑約25ヘクタールの河西農場を経営。人望もあつく、重要な公職にも携わりました。67歳で亡くなった時には全村民が葬式に参列したと言われています。

開拓に必要なお金はどうしたの？

由造たち一行は、ふるさとで財産を売って、お金にして持参し、開拓に必要な鍬や鋤、果樹の苗木などを買いました。

一行のおサイフチェック

少ない人で **200円**
（現在で約196万円）
多い人で **1,500円**
（現在で約1,467万円）
※当時の米の価格から推測

なんで厚別を選んだの？

当時は、現在の白石区のほうまで開拓が進んでいたため、未開の地である厚別の開拓のほうが有利と考え、賛同するわずかな仲間とともに、厚別川の川沿いを選んだようです。

そのころの札幌

札幌停車場（現札幌駅）／1882年、83年ころ

札幌の街並み／1913年

次のページから各地域ごとの詳しい様子を見てみよう！

信州開墾地

GO メイジ・タイショウ FOR アツベツ ヒガシ・ニシ・カワシモ MAP

HISTORY

1883年（明治16年）、河西由造たち8戸が開拓したこの地域は、水田の開墾に成功したことで人が増え、20年もたたずに大きな集落を形成するほどになりました。

信濃神社／1898年ころ

みんなの気持ちをひとつに信濃神社

信濃神社／2009年

信濃神社ができたのは、1897年（明治30年）。河西由造たちは長野県各地から来住した人たちが心をあわせて開拓に励めるようにと、ふるさと・信濃（現長野県）で最も崇敬されている信州諏訪大社の御分霊をまつりました。

今も残る『信濃』の名　小学校・中学校・児童会館・公園・交通など

交通の要

GO メイジ・タイショウ FOR アサヒマチ MAP

HISTORY

1887年（明治20年）、千田松太郎、渡辺吉太郎たちが炭焼きをしたのが始まり。1889年（明治22年）に江別街道（現国道12号）が開通し、1894年（明治27年）には厚別駅が開業。旭町は交通の中心地となりました。

阿部仁太郎／初代

開拓の中心に2人の阿部仁太郎

豊平で成功していた仁太郎（初代）は、厚別に注目し阿部農場を作り、厚別の発展に力を注ぎました。また、仁太郎（2代目）と協力し、1892年（明治25年）に自分の土地を提供して厚別駅と旭町を結ぶ停車場通を完成させるなど数多くの功績を残しています。

功績① 厚別駅の創設／1894年　功績② 郵便局の創設／1896年　功績③ 電力をまちに誘致／1919年

阿部仁太郎／2代目（幼名：初太郎）

豊かな水田地帯

大きかった大谷地

当時の大谷地は、月寒川と厚別川に挟まれた低湿地帯全体を含む広大な地域でした。

釣橋

昔、厚別川に釣橋があり、その近くに住んでいた人を「釣橋さん」と呼んでいました。その人が今の釣橋付近に移り、住民がその場所を釣橋と呼んでいるうちに、地名になったと言われています。

お米が豊作

1886年(明治19年)には、福井県から移住した人たちが大谷地で米作りを試み、その年は1年で食べる米の量よりも多く穫れたそうです。

きっかけは、吉田用水

1891年(明治24年)、厚別川から月寒川にいたる約5kmの吉田用水が完成しました。吉田善太郎が中心となって約50人が汗と泥にまみれながら、4カ月で完成させたそうです。これにより大谷地の開拓は急速に進みました。

開拓を見守ってきた大谷地神社

大谷地神社／1921年

GO メイジ・タイショウ FOR オオヤチ

HISTORY

1885年(明治18年)、阿住勘五郎、駒林鉄五郎が開拓したのが始まり。大谷地は低湿地帯の特性を生かし豊かな水田地帯として、飛躍的に発展していきます。

吉田善太郎

発展を支えた苦労人 吉田善太郎

善太郎の開拓生活は、家一軒と1ヘクタールの土地、馬5頭からはじまりました。農業をあきらめた人たちの土地、さらに大谷地の土地も譲り受け、必死に開墾したそうです。善太郎の大谷地牧場は最盛期で、水田70ヘクタール、畑60ヘクタール、小作三十数戸をもつ大農場になりました。

一大酪農地帯

酪農先進地

この地域は、宇納牧場(のちに宇都宮牧場、出納牧場に独立)、星子牧場などが開設され、全国各地から酪農を志す青年たちがこの地を訪れ、巣立っていきました。

星子牧場の冬の牛乳運搬／1935年

立花

国道274号とJR千歳線が交差する場所は、このころ立花とよばれ、広島街道の中間の休み場として栄えていました。

1889年、90年ころの立花

GO メイジ・タイショウ FOR ノッポロ

HISTORY

1885年(明治18年)、青森県出身の小ケ口石太郎たちが開拓したのが始まり。大正から昭和にかけ宇納牧場など多くの牧場が開設され、一大酪農地帯へと変わります。

宇都宮仙太郎

日本酪農の父 宇都宮仙太郎

民間初のバター製造も手掛けたほか、優秀な種牛を輸入して品種改良に努めるなど酪農界に大きく貢献し、「日本酪農の父」と言われています。1924年(大正13年)に、出納陽一と共同で宇納牧場を開設しました。また、1925年(大正14年)に北海道製酪販売組合(のちの雪印乳業)をつくり、その組合長として活躍しました。

宇納牧場／1927年ころ

のどかな農村地帯

厚別への道に「板橋」あり

開拓当初は青少年科学館付近が、低湿地帯だったため厚別へ出る道がありませんでした。そこで1897年(明治30年)、地域の人たちが協力して湿地に丸太を打ち込み、その上に板を敷いて、長さ約90m幅約2mの道を作りました。この道は「板橋」の名前で親しまれ、往来に役立ちました。

小野幌尋常小学校／1921年

農作物の移り変わり

麦、芋、いなきび、ひえ、そばなどの畑作が盛んで、しだいに販売を目的とした、燕麦、亜麻、ビール麦などの栽培が増えました。

女性が支えた開拓生活

女性は男性と一緒に農作業をして、さらに家事・育児をしていました。開拓生活を支えていたのは女性たちだったのです。

ある女性の1日

4時	6時	12時	18時	20時	23時
起床	家事・準備	畑作業	昼食	授乳	畑作業	炊事	夕食	家事	就寝

GO メイジ・タイショウ FOR シモノッポロ

HISTORY

1885年(明治18年)、筑前(現福岡県)出身の石松弥七たちが、開拓したのが始まり。明治30年代前半からは畑・水田、酪農がおこなわれ、農村地帯へと発展していきました。

熊の沢公園にあった 小林牧場

下野津幌で本格的に酪農を始めたのは、1887年(明治20年)に福井県から来た小林吉松の子、小林政吉と言われています。1934年(昭和9年)もみじ台に小林牧場を開設し酪農経営を行いました。その後、もみじ台団地建設のために上野幌に移転し、その牧場も現在は厚別公園競技場になっています。

小林牧場／1967年

熊の沢公園／2009年

瑞穂豊かな地

もとは江別

小野幌はもともと、江別村(現江別市)でしたが2回にわたって白石村に編入され、厚別とともに発展した地域です。1913年(大正2年)に現在のJR函館本線の南側の地域が、1918年(大正7年)に同線の北側の地域が白石村となっています。

買い物は厚別で

小野幌の住民は江別村時代から、日用品は厚別で買っていました。子どもたちは、1899年(明治32年)に小野幌簡易教育所が開設するまで、信濃尋常小学校に通学するなど、厚別と深いつながりがありました。

阿波開墾地と越中山

この地域は、徳島県や富山県の人たちが多く開拓をしていたので、昭和の初めのころまで出身地にちなんだ地名がついていました。

GO メイジ・タイショウ FOR コノッポロ

HISTORY

1889年(明治22年)に山口県出身の秋本槌五郎が開拓したのが始まり。1892年(明治25年)に、水田試作を始め1912年(明治45年)ころには、鉄道の北側の7割が水田となっていたそうです。

実り豊かな水田を願った 瑞穂池

水田耕作が広がるにつれ、野津幌川と小野津幌川の水量では農業用水の確保が難しくなりました。そのため、1927年(昭和2年)白石第1土功組合を設立し大きなため池の建設工事を開始。苦難をへて1928年(昭和3年)、周囲4km、貯水量170万㎥のため池が完成しました。実り豊かな水田になることを願い、「瑞穂池」と命名されました。

建設工事／1927年

瑞穂池／2009年

水害との闘いの歴史

山本の歴史は
水害との闘い。
これに尽きるんじゃ。

厚別原野

山本は、かつて厚別原野と言われ、農耕に適さない泥炭の湿地帯でした。そのため区内でも一番遅く開拓が始まりました。

地名にもなった山本親子

山本久右衛門は私財を投じてこの地に農場を開き、開拓に力を尽くしました。子の山本厚三も父の意志を継ぎ、道路や排水溝を整備し、土地の改良に力を注ぎました。農地解放前の1944年(昭和19年)には、極めて低価格で農地を解放し、小作人の自立の道を拓きました。山本親子に対する地域住民の感謝の思いは、「本田」と呼ばれていた地名を「山本」と改称したことからもわかります。

父・山本久右衛門

子・山本厚三

山本排水 ー山本川の原点ー

この地域は土質が悪いため造田に大変な苦労をしました。そこで小池嘉一郎が中心となって排水溝づくりに力を注ぎ1920年(大正9年)に山本排水が完成。この排水溝が発展し、今の山本川になっています。

1940年ころ

資産家 山本家

1918年(大正7年)発行の「北海道百番附」のお金持ち番付に、山本厚三の名前があります。この冊子によると当時200万円(現在で35億7,600万円)以上の資産を持っていたようです。

※当時の米の価格から推測

GO メイジ・タイショウ FOR ヤマモト

HISTORY

1908年(明治41年)に小樽で漁業や海運業を営む山本久右衛門が払い下げを受け、1909年(明治42年)に山本農場を開設したのが始まり。この地の開拓は災害や土地改良など苦労の連続で大変厳しいものでした。

雪の上を水が走る？ 水害との戦い

山本は低地のため、1913年(大正2年)、1926年(大正15年)に大規模な水害に見舞われました。小さなものを含めると毎年のように水害があったと言われています。
水害は冬でも起こり、雪の上を水が走って流れ、家の中では浸水した水が氷となって、床上約70センチの高さまでおおったこともあったそうです。

『昔は苦労の連続じゃ。』

う〜ん…厚別の開拓はどこも本当に大変そう。

その通り。今の暮らしがあるのも、先人たちの苦労があってこそなんじゃよ。だからしっかり歴史を勉強して理解しなきゃいかん。

でもタイムマシンがない21世紀の人たちはどうやって体験すればいいの？

厚別区の北海道開拓の村には、この当時の家が今でも展示されておるんじゃ。

へぇ〜。こんな暮らしをしていたんだ。

まだまだ厚別区の知らないことがいっぱいあるのね。

なんだかもっと勉強したくなってきた！

感心、感心。次のページからは、地名の由来や開拓の道具、食事などをみんなで勉強しよう！

北海道開拓の村 ☎011-898-2692 所 厚別町小野幌50の1

昔の暮らしを学ぼう

炭は生活必需品

開拓生活は、電気や水道がありません。土地を開墾するときに切った木は、木材やまきとして日常の生活で使いました。また、炊事や暖房などに欠かせない炭をたくさん作り、札幌のまちで売ってお金にして生活の足しにしていました。